

平八幡神社祭礼について

民俗班 (徳島民俗学会)

高橋 晋一*

1. はじめに

本稿の目的は、徳島県麻植郡美郷村大字別枝山字平^{たいら}に鎮座する八幡神社の祭礼 (例祭) の概要を報告するとともに、その特徴を指摘することにある¹⁾。八幡神社祭礼は、県内で5カ所にしか見られない「七十五膳²⁾」と呼ばれる特殊神事、文化年間に伝来したとされる獅子舞など特筆すべき民俗を含んでいるにもかかわらず、これまでその詳細が紹介されることはなかった。急激に変貌しつつある山村の貴重な民俗文化の姿を今記録しておくことは、大いに意味のあることと考える。

2. 八幡神社の概要

大字別枝山字平は、美郷村のほぼ中央部に位置する。集落の東を川田川と国道193号線が並行して走る。人家や耕地は道路から上方の200~400mの傾斜地に散在している³⁾。



写真1 八幡神社

八幡神社 (写真1) は、平集落の中心部に中枝小学校と隣接して建つ。祭神は誉田別命・足仲彦命、息長足姫命。享徳3年 (1454) の棟札があり、現在地から2km西方の「宮んとう」という峠にあった八幡社を勧請したと伝える。境内末社の美奴間神社は、延喜式内小社天水沼間比古神天 水塞比売神社に比定される古社で、そこに室町時代に勧請されたのが現在の八幡神社である⁴⁾。寛保3年 (1743) の『阿波国神社御改帳』には「別枝山平名八幡宮 神主別枝山松田信濃」とある⁵⁾。明治8年に村社となる。

3. 祭祀組織

八幡神社の氏子区域は、①城戸、②中屋、③蔭・鍛冶屋、④井頭・当地野、⑤下浦・大城戸・穴地、⑥平、⑦高開の7つのトウヤ地区に分かれており、各トウヤ地区より一人ずつトウヤを出す。トウヤは一番ドウヤ、二番ドウヤ、……七番ドウヤまであり、地区の順に年送りで回ってくる。数年前まで全体で8つのトウヤ地区があったが、過疎化の影響で平成12年に7地区に再編成した。氏子数は昭和40年頃には120戸あまりあったが⁶⁾、現在は約70戸に減少している。

そのほか、各トウヤ地区から2人ずつ (計14人)、七十五膳の神饌を調製する「御膳こしらえ」の役を出す。御膳こしらえは神輿かきを兼ねる。

屋台 (肩で担ぐタイプの山車) は、担ぎ手 (若い衆) と打ち子 (子供) が少なくなったため、7、8年前より出ていない。屋台には6人 (師匠1人、打ち子5人 = 大太鼓、小太鼓、鉦) が乗り込むので、かなりの重量になる。屋台は現在、神社右手の倉庫

* 徳島大学総合科学部

に保管してある。屋台が出なくなった現在も輪番で屋台の責任者である屋台ドウヤ（1名）を出している。かつては各地区から4人ずつ屋台がきを出した。

4. 祭りの過程

八幡神社の例祭（秋祭り）は現在、10月24日に行われている。以前は旧暦9月9日に行っていたが、昭和の初めに現在の日程に変更になった。

宵宮（10月23日）は祭りの準備（境内の清掃、飾り付け、職立てなど）くらいで、特に行事はない。

10月23日は川田川を挟んだ向こう山の別枝山字照尾にある照尾神社、24日は平の八幡神社、25日は平から川田川を上流に1kmほどさかのぼった別枝山字宮倉の八幡神社の秋祭りで、3日連続で大字別枝山の祭りが行われている。かつてはそれぞれの祭りに3台の屋台が行き来してにぎやかであったが、現在は屋台は出ていない。

24日（本祭）は早朝より御膳ごしらえの当番14人（いずれも男性）が神社に集まってくる。一番ドウヤは5合の米を炊いて朝8時に持ってくる。平成13年の一番ドウヤは下浦の枝川明義氏であった。

御膳ごしらえ（写真2）はごはんを丸めて「ゼニゴック（銭穀）」と呼ばれる団子状のものを作る。ゼニゴックはやや大きめの丸いもの80個（75+5）と、小さく平たいもの320個（ $(75+5) \times 4$ ）を作る。また、七十五膳の神饌の中央に配置する大きめのご飯（上部がすぼまった四角錐状のもの）を80個、木の型に詰めて作る。

栗は井頭地区のトウヤが毎年持ってくる。橘は、採れるところから出す。

栗、橘、ゼニゴック（大）各1個を取り、それぞれに長さ10cmほどの竹串（竹を裂いて作る）を刺す。その上部に長さ2cmほどに切ったズキ（里芋の茎）を刺し、稲藁を巻き付けてまとめる。全体が三角錐のような形になる。

三寸四方の折敷の上で七十五膳の神饌を組み立てる。まず、台の中央に型にはめて作った上がすぼまった形のご飯を載せ、その上に、先に作った栗・橘・ゼニゴックの三角錐をかぶせるように載せる。空いている四方に小さなゼニゴックを載せる。最後にズキの頭にカッターナイフで1cmほどの切れ目を入れ、長さ8cmほどの小さな御幣を差し込めば完成である。これを80個作る。

この変わった形の神饌については、氏子の間に次のような話が伝えられている。

自然の恵みを与えてくれる三宝荒神（三本の竹串で象徴）に感謝し、八百万の神々に氏子・在所を守護してもらうようお願いを込めて、その年に土地でとれた穀物・果物・野菜などの収穫物を「四合わせ」（=幸せ。四角い膳）でお供えする。中央の穀物が全体を代表し、栗の丸さは平和を意味している。ズキで3本の竹串を結ぶのは縁結びの意味がある。

できあがった七十五膳の神饌（写真3）は八寸四方の三方に載せ、拜殿内左手の神饌飯案に据え置かれる。七十五膳の神饌は小さいので、一つの三方に4個あて載せる。

七十五膳の神饌は $75+5=80$ 個作る。七十五膳として三方に載せ神前に供する以外に、裏山の王子権現（美奴間神社）、神社右手入口のコミヤ（美郷の社家・松田家の屋敷神）と、さらにその奥の山道を



写真2 七十五膳の神饌の調製



写真3 七十五膳の神饌

100mほど上ったところの窟の中にあるコミヤ（地元
の人は八幡神社の奥の院ではないかと言っている）、
鳥居元の狛犬一對に各1個（計5個）の神饌を供え
る。これら5つの神饌は後で回収することはない。

10時、神職（麻植郡山川町の川田八幡神社宮司・
熊代美仁氏および助勤神職）が到着、例大祭の神饌
の準備をする。神饌は大型の三方5台に載せる（神
饌の内訳は「餅・御神酒」が2台、「大根・生鯛」
が2台、「塩・水」が1台）。

13時より例大祭の神事。神職、トウヤ、神輿かき、
神輿のお供一同は拝殿に参進。神事は修祓、宮司一
拝、献饌のりとそうじょう たまくしほうてん、祝詞奏上、玉串奉奠、宮司一拝の順。
献饌の際には全員が起立し、榊の葉をちぎり各1枚
口にくわえ、神饌仮案から本殿にかけて等間隔で並
ぶ。続いて、神饌仮案から本殿まで手渡しで三方
（通常の神饌および七十五膳の神饌）を役送する
（写真4）。本殿内の神饌案は3段になっており、そ
こに通常の神饌と七十五膳の三方を並べる。神事は
15分ほどで終了する。

13時30分、社殿前（境内西側）で平八幡神社獅子
舞保存会による獅子舞⁷⁾の奉納が行われる（写真5）。
昔、穴地の穴山という家に病気が発生し、魔よけの
ために獅子頭一對を祀った。法印様が見に来
て、病気よけのために獅子舞をするように言われた
ので、以後獅子舞を行うようになったと言う。創始
は文化年間（1804～18年）と言われており、山川町
北島（さらに元をたどれば香川県）から伝わったも
のとされる。

社殿前に太鼓4台を据え、その前で社殿に向かい、
2頭だての獅子が舞を披露する。拍子木2名が音頭
をとり、錫杖しゃくじょう1名が舞を見守る。太鼓は両端の
「向かい太鼓」2台（大人が担当）、内側の「中太鼓」
2台（子供が担当）に分かれており、中太鼓は太鼓
をたたきながら獅子を操るしぐさをする。

14時、神幸祭しんこうさいの神事。神輿を拝殿に安置し、その
周囲を覆うように絹垣を張りめぐらせる。トウヤ、
神輿かきらは絹垣の中に入る。神事は修祓、宮司一
拝、献饌（御神酒の蓋を開ける）、祝詞奏上、徹饌、
出御の順。徹饌では、神前（本殿）の神饌案に奉
じた三方（通常の神饌と七十五膳の神饌および甘酒）
を神職およびトウヤ、神輿かき、神輿のお供が順次

手渡しで拝殿西側（左手）の神饌仮案に下げていく。

出御の後、絹垣を外す。神輿かきが神輿を担ぎ、
社殿を出る。天狗（猿田彦）1名、屋台ドウヤ（長
さ約1mの大きな御幣を持つ）1名、幟（7本）、
御幣（7名）、毛槍（2名）、神饌（三方5台。通常
のもの）の後に、神輿、神職が続く。天狗は神輿担



写真4 献饌



写真5 獅子舞



写真6 神輿巡幸

当地区から出る。御幣はトウヤ（一番ドウヤ～七番ドウヤ）が持つ。幟持ちは各地区で1～2人あて出す（幟はトウヤ地区によって本数が異なる。役は各トウヤ地区で相談して決める）。

一同は鳥居をくぐり、境内を出た後、突き当たりの上柿徹氏宅前を左折、100mほど進み川田川に突き当たったところで左折、川田川沿いに北に200mほど進む。ここは平集落の外れで道は行き止まりになっている。一同はここでは止まらずにぐるっと回り元の道を100mほど引き返す（写真6）。ここに神輿2基（神社に近い側（南側）に八幡神社、遠い側（北側）に王子権現の神輿を、それぞれ神社の方角（西側）を向くように据える）と幟、神幸具を据え置く。神輿の前に三方に載せた神饌を置く。

14時30分、御旅所祭の神事。修祓、宮司一拝、献饌、祝詞奏上、玉串奉奠、徹饌、宮司一拝の順。

神事終了後ただちに神輿が御旅所を出て社殿に戻って行く。天狗、幟、屋台ドウヤなどに続き神輿2基が進む。15時、神輿が社殿に到着。神輿かきは拝殿内に参進、神輿を据え置く。神輿の周囲に絹垣を張りめぐらし、還幸祭の神事が行われる。神事は修祓、宮司一拝、入御、祝詞奏上、宮司一拝の順。還幸祭の神事終了後、絹垣を外す。直ちに一同、後片づけに入る。神饌仮案に据えられた七十五膳は、参列者が各自持ち帰る（家で食する）。

5. おわりに

以上、八幡神社祭礼の概要を記述してきた。祭りの中心は神輿巡幸と屋台の運行（現在は中断）であり、その点では近隣地域の祭礼と共通する性格を持っているが、すでに記した七十五膳神事、200年あまりの歴史を持つ獅子舞といった要素が八幡神社祭礼を特徴づけている。

このような八幡神社祭礼のあり方は、近隣地域の祭礼と比較することにより、より明確になる。

吉野川流域は山車の中でも屋台が多い地域で、県南のだんじり（曳くタイプの山車）文化圏とは一線を画している。美郷村内でも、かつてはほとんどの神社の祭りで屋台が出ていた⁸⁾。八幡神社祭礼はこうした「屋台文化圏」の中に位置づけて理解することができる。

75膳の神饌を供え、神前に謝意を表する七十五膳神事は、県内ではほかに麻植郡川島町の川島神社、麻植郡山川町の川田八幡神社、名西郡神山町の黒松八幡神社、同じく神山町の新田八幡神社で行われている。いずれも地域的に近接しており、伝播ルートについては即断できないが、これも地域間の文化交流の中で展開した民俗と思われる。

獅子舞については、山川町北島から伝わったと言われているが、2頭だての獅子である点、獅子+獅子と絡みながら太鼓をたたく子供という構成、獅子舞の芸態などに、吉野川流域の獅子舞との共通性を見ることができる。

このように、八幡神社の祭礼の形態は、神輿巡幸を核としつつ、周辺地域との文化交流の中で屋台の運行・七十五膳神事・獅子舞といった要素を付加しつつ形成されたものとしてとらえることができるのである。

注

- 1) 本稿の元となった現地調査（観察および聞き取り調査）は、平成14年10月23～24日、平成15年11月14日、24日に実施した。
- 2) 神前に75膳の神饌（神様の食事）を供えるという特殊神事。75は「数の多い」ことを象徴している〔齋藤ミチ子（1999）、1頁〕。奥村貴子が調査した範囲では、七十五膳神事が行われている神社は全国で29カ所あるという〔奥村貴子（1995）、7～17頁〕。
- 3) 角川日本地名大辞典編纂委員会（1986）、618頁。
- 4) 徳島県神社庁教化委員会（1981）、317頁。
- 5) 神道大系編纂会（1989）、47頁。
- 6) 美郷村史編纂委員会（1969）、554頁。
- 7) 八幡神社の獅子舞の詳細については、拙稿「美郷村の獅子舞」（2004）：『徳島地域文化研究』2、103～109頁を参照のこと。
- 8) 美郷村史編纂委員会（1969）、612頁。

文 献

- 奥村貴子（1995）：七十五膳据神事の研究（上）『岡山民俗』203、1～21頁。
- 角川日本地名大辞典編纂委員会編（1986）：『角川日本地名大辞典 徳島県』角川書店。
- 齋藤ミチ子（1999）：多膳形態の諸相―七十五膳について『國學院大學日本文化研究所報』207、1～3頁。
- 神道大系編纂会編（1989）：『神道大系 神社編41』神道大系編纂会。
- 徳島県神社庁教化委員会編（1981）：『徳島県神社誌』徳島県神社庁。
- 徳島県教育委員会文化課編（1985）：『徳島県の民俗芸能』徳島県教育委員会。
- 美郷村史編纂委員会編（1969）：『美郷村誌』美郷村。